

ふえいと/いちやらぶ
おーだー

カピバラ@番長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは外界から隔絶された地にある巨大な施設・カルデア。

ローを模して造られた絶海のオアシス、ノウム・カルデア。

けれどそこは誰にでも開かれた場所ではなく、白紙化された現状では、そもそも訪れる者もいなかった。

故に。

この施設で如何なる現象が起きようとも当事者以外に観測される事はなく、恐らくは記録される事もないだろう。

あるのは、ただ、人理を護るため、失われゆく世界で再び笑うため、我を貫き通すと

決めた凡人の暖かな〔日常〕だけだ。

かつて、彼と同じような世界を志を持ち、実際に変化をもたらした人々と共に……

————要するに。

(自称) 普通の人となんか凄いい人が仲良くしてる場所。

ここでは、外で起きてるヤバい事とか、いざれ起きるかもしれないヤバい事とか全部忘れて、自分の気持ちに正直になってる人が暮らしています。

細かい事とかぜーんぶ抜きにして、おおざっぱに生きてます。

目次

ふえいと／いちやらぶ	おーだーく刑部
姫編く	1

ふえいと／いちやらぶ おーだー～刑部姫編～

ひっそりとした、寂しい廊下。

近くには誰もいなくて、私の足音だけが空しく響いてる。

こつん、こつん、って、珍しく誰もいない廊下に厚底のヒールの音が。

「……はあ」

なんて言うか、今日は変だ。

そもそも、気まぐれとは言え私が自発的に外へ出るだなんて、海水が全部抜けるよりあり得ないはずだったのに……

「お友達、かー」

知らず知らずのうちに口元がにやけていくのが分かる。

分かっている。私達はどこまで行こうとも主人と隷属の間柄。

彼がそう言うのを拒むだけで、周りから見れば一目瞭然だ。

だけど、それを【友達】と言うことで、きつと私達に気を遣ってくれているだけなんだ。

そう。あくまでも、私達、に。

「……………めんどくさいなあ」

分かってる。それも分かってるんだ。

彼にはそんな気が一切ないって事も、気を遣っているって考えも、まるつきりないことくらい。

だからめんどくさい。

わざわざ裏の裏まで見ようと考えてしまう自分がめんどくさい。

だから…………。うん、だから。

「ん、おつきー。どうぞ」

「はーい。ありがと、まーちゃん」

彼の手で開かれた、彼の部屋に入るため、こんな気持ちはダストボックスにしまっておかなければいけないんだ。

「ねえ、まーちゃん？」

「んー？」

一人分にしては少し大きいベッドの上に並んで横になり、姫の持ってきた漫画を一緒に読み耽る。

これだけでもう充分に幸せな時間なのだけど、やっぱり足りない物がある。

「ここって、コタツ無いの?」

「うん、無いよ」

夏場でさえ恋しくなる愛しのマイ兵器、コタツ。

文字通り、万年コタツガールの姫にしてみれば、春夏秋冬あつてしかるべきアイテムだけどそれはそれ。

まだ冬も半ばくらいこの時期に同じ出身のまーちゃんのマイルームにそれがないのはおかしい。

「あれね、あるとね、必ず中に誰かが潜んでるから、外したんだ」

「あつ……」

と、思っていたけど、前言撤回。

きよひーを始めとするマスター大好きサーヴァント達にしてみれば、こんなに格好の隠れ場所はない。

……きつと、並みじゃないメにあつてきたんだらうなあ。

「もしかして、寒い?」

「え? まあ……うん」

ベッドの上で身を起こしたまーちゃんに尋ねられて曖昧な返事を返してしまう。

別に寒いわけじゃない。ただ、物足らないな、つてだけで。

でも、今更隠す必要のない事だとは言え、米粒くらいのプライドはある。要は恥ずかしい。

「んー、そういう事なら」

「へ?」

そう言うまーちゃんは、ベッドの上に重ねた漫画を子物置きに重ね直し……。

「これならあったかいんじゃない?」

姫の上に布団を掛けた。

……掛けた!?

「ちよ、ちよつと!」

「あ、イヤだった?」

「いや、そうじゃなくてね!」

肩口まですっぽりと覆いかぶせられた掛け布団を引っぺがして、抗議しようとするけど言葉が出てこない。

ホンツト、彼は時々こういう事を平然とするから侮れない。

分かってる、ここで本気になっちゃだめだ。今まで何度もやり過ぎしてきたように、今回もやり過ぎすだけだ。

「あ、あのねまーちゃん。こーいう事は、もつと考えてやらなきゃだめだよ？暖房だつてあるんだし、どこかから支給してもらえようお願いすることだつてできるし。

……自分の使つてる布団を使うのは、他に打つ手が無くなつた時の最終手段だよ？今回は姫だつたからよかつたけど、他の……例えばきよひーとかだつたら大変だつたからね？」

そうそう、こうやって彼の素行を一つずつ正し行つて、他のサーヴァント達にはしないよう直してあげなきゃ……つて、そうじゃなくて！いや、そうなんだけど！！

ああもう、これじゃまるで独占したいみたいじゃない！！

「……そっか、そうだね」

なんて考えていると、まーちゃんは少し残念そうな顔をして謝ってきた。

うう、違う。そんな顔をしてほしくて言つたんじゃないのに……

「でも、この部屋にはエアコンとかないし、今日はみんな出払つてるしで、こうするかかなかつたんだ。

先にちゃんと言わなくてごめんね」

「……ちよつと待て？」

聞き捨てならない事実には思わず聞き返してしまう。

「あ、エアコン？」

あれね、なんかマシユが『乾燥して先輩が風邪ひいたり唇が割れたりしたらどうするんですか!!』って言って、ロリンチちゃん達に撤去を求めたんだ。だからないよ」

「いや、そつちじゃなくてね!?!というか、過保護!!」

「だけど、不思議と寒くないんだ。まあ、今日はちよつと寒かったけど」

「それ多分、きよひーがいるからだよね!?!って、だからそうじゃなくて!!」

「……?」

この期に及んでシラを切るつもりなのか、それとも本当に分かってないのかはこの際どうでもいい。

私が今知りたいのはただ一つ。

「……………本当に、誰もいないの?」

「うん。正確には、僕とおつきーしかないよ」

「ぎゃーー!!!」

知りたくなかった、でも、知らずにはいられなかった事実、完全に私のキャパがオーバーした。

なんで!?!なんで!?!私それ、全然知らなかったんだけど!!!

「……あ、そういうえばおつきーには言わなかったんだっけ。

今日はみんなで休暇を取って、英気を養おう。ってなったの」

「知らなーい!! 一個も聞いてなーい!!」

突如訪れたまーちゃんとの一つ屋根の下二人きりイベント。

たったそれだけでも私の心臓は爆発寸前なのに、もう一つの事実で血管が暴発しそうになつてる!!

だって、え?この状況を、まーちゃんがわざと作ったって事でしょ!?

そ、それってつまり、つまり……?」

「だつておつきー、そう言うが無理してどこかに行こうとするもんね。最初はどこにもいかなーい、とかいうけど、みんながみんな出払っちゃうと、寂しくなつて結局ついてきちゃうし。」

それだとおつきーの休暇にならないから、って事で、みんなにお願いして黙つてもらつたんだ」

だと思つた。

知つてた。この人はナチュラルでそういう事する人だつて、姫知つてた。

アホー!!このドキドキを返せー!!

……とは口が裂けても言えない。

彼は私の事を想ってこんな行動をとってくれたんだ。

悔しいけど、まーちゃんの言う通り。

一人は好きだけど、独りが好きなわけじゃない。薄い壁一枚隔てた隣でわいわいして
るのを聞いて、時々会話に混ぜてもらいたい。

そんなめんどくささの究極を極めた私の事を、憎いくらいよく分かっている。

でも、だけど……

これだけ頭で理解しても心は蚊帳の外。

一度高まった想いが簡単に収まるわけがない。

………だったら、する事は一つ。

「とか言って、ホントはまーちゃんが姫と二人つきりになりたかったんじゃないの
??」

同じ羞恥の谷に落ちてもらうだけだ。

天然優しい彼の事だ。きつと、『おつきー一人だけだと流石に寂しいだろうし、カル
デアに誰もいないのは問題だろうし、僕は残るよ』とでも言ったんだろう。

だったら、そこを煽るだけ煽って、顔を真っ赤っかにしてやる!!

「まあ、少しだけある、かな」

「………へ?」

って、作戦のはずが、彼の一言で全て崩壊した。

「実はね、おっきーの言う通りなんだ。」

ごめんね、ちゃんと確認取るべきだとは思ったんだけど、やっぱ、どうしてもそこだけは恥ずかしくって聞けなかったんだ。

最近は全然二人だけになれなかったし、なれたとしても原稿やってたりで、一緒にいるって感じじゃなかったし……

馬鹿だよ、こうやってバレた方が嫌な思いさせちゃうって言うのに」

「な、な、なんですと」

予期せぬ発言、ああいや、予想してたけど予想してなかったというか……

あー、とにかく!!期待していた通りの、予想外の事実にもう思考が回らない。

だっつつまり、それっつつまり、わ、わ、私と一緒に居たかった、つていう、最早愛の告白と大差ない発言で……

「ふ、ふ、ふ……」

「魅?」

「不束者ですが、よろしくお願ひしますっ!!!

………つて、ギャー……!!!

やった、やらかした!!遂にやらかしたぞこの大バカ!!

さつき言ったじゃん！自分に言い聞かせてたじゃん！！この人はナチュラル優しい天然記念物だつて！！

そんな人物の言うことだもん！どうせいろんな人に言ってるもん！『それ、告白？』つて聞いたら『え、そうなの？』つて言ってくるような人だもん！絶対にそうだ、そうに決まってる！！乙女ゲーで今回も見た！！

「まっつてまっつてまっつて！今のなし、今のなーし！！もっかい最初から、コンティニューを姫は推奨しまーなーす！！」

そうだ、それがいい。そうしよう！

ここは一旦部屋から出て、何食わぬ顔で入り直して、一から十までリセットしよう！大丈夫、分かってくれる。まーちゃんは、ううん、マスターはどこぞの王様じゃないからきつと人の心をつかってくれる！城化物だけど心はピュアピュアな人間だもの、分かってくれる！！

……よね？

「……………」

チラリと振り向いた先。

そこに居るのは見なければ良かったと思ってしまうくらいに赤面した彼の顔。

嬉しかったり、恥ずかしかったり、ドキドキしたりがないまぜになった時の、私の原

稿で時々見る顔。

そう、どういう時にこの顔になるのかは、よく、理解してる。

「……本気にして、いいの？」

たった一度だけの小さな問い。

聞こえなければそれでいい、という、身勝手極まりないコトバ。

けれど、彼は頷いた。

大きく、一度だけ、頷いてくれた。

「僕も好きなんだ」

「……………バカ」

「え？」

「バカ!!」

ああ、もう駄目だ。

これ以上は抑えきれない。

タグ付けしたくなくて、知らんぷりし続けてきたツケが全部、回ってきた。

こうなったら最後。あとはもう、とことんまで吐き出すしかない。

その後どうなろうと知ったこつちやない。そこまで考えてたら、多分きつと、本音のほの字も言えないだろうから。

「バカバカ！遅い!! 気づくのが遅すぎる!! 姫が……私がどれだけアピールしてたと
思ってるの!?! 立ち入り禁止の時も入ってきていいっていうのを皮切りに、ご飯食べる
時、ゲームする時、霊基の調子が悪い時、後それと! こうやってマイルームにお邪魔す
る時!!!」

なのに、なのに、二年だよ!?! アピール始めたのが一年前からだってとしても、遅すぎ
るでしょ!?! なのに、なんかすっごい仲のいい幼馴染ポジ? クラスの話せる男勝り親友ポ
ジ? みたいなの、みーたーいなー!! 関係に落ち着いちゃって『あ、これもうルート無い
なー。うん』って諦め始めてた頃なんだよ!?!

なのに、今更そんなこと言われたら……もう、諦めきれなくなっちゃうでしょ?

姫多分めんどくさいよー。自分でも時々思っちゃうくらいにはめんどくさいの確定
してるし。

……それでも、いいの?」

予想通り、というか自分でもびっくりするくらいつらつらと口から出て行った想いの
丈。

言った内容の半分も思い出せないけど、多分めんどくさいし、間違いなく拗らせてる。
でも仕方ない。どうしようもない。

考えてもみればこちとら白鷺城が出来た頃から生きてんだ。今更拗らせがなんだ!

かかって来いってんだ!!

「……そんなところも好きだ、つて言ったら、怒る?」

「はい????」

な、な、なんだそれ。

そんな間男みたいなセリフを、よくもまあそんな満面の赤面で言えるなあまーちゃん
は。

そんなの、そんなの……

「怒る……」

「あ、あはは」

怒る。絶対、怒ってやる。

そう、思ってるのに、私の身体は、もう、マスターの腕の中にすっぽりと納まってい
た。

「……………ねえ、マスター」

「なに、刑部姫」

「この後、どうすればいいんでしょうか」

もごもごと彼の胸板の上で動く私の唇は、こんな時ばかりロクな事を言ってくれな
い。

何さ。私は姫なんだから、この後の事を知らなくたって変じやないもん。確かに知識としてはあるし、何なら本にして出したりしてるかもだけど、それとこれとは別だもん。

頭の中が真っ白になってるだけだもん!!!!

「……………分かった。じゃあ、全部僕に任せて。大丈夫。知識は全部、おつきーの本で得てるから」

「え、ちよ、待って、それって…………」

「さ、『さあおいで子猫ちゃん』」

「ぎゃ—————!!!」

こうして、晴れて私こと刑部姫と、最後のマスターは恋人関係になりました。

今後、色々な苦楽を共に乗り越え、いずれは結婚とか行くのかもしれないですけどそれはそれ。

外なる神とか聖杯とかが私を吃肉させてくれない限り、この先はないでしょう。

……………はい。その事についてはまだいいんです。

今はただ。

「『ふーん、拒むんだ。おもしろー女』」

「ギャーーーーー！！！！」

この羞恥プレイをどうかしててください！！！！

e n d .